山崎の甚三郎君傳

特234
776

始

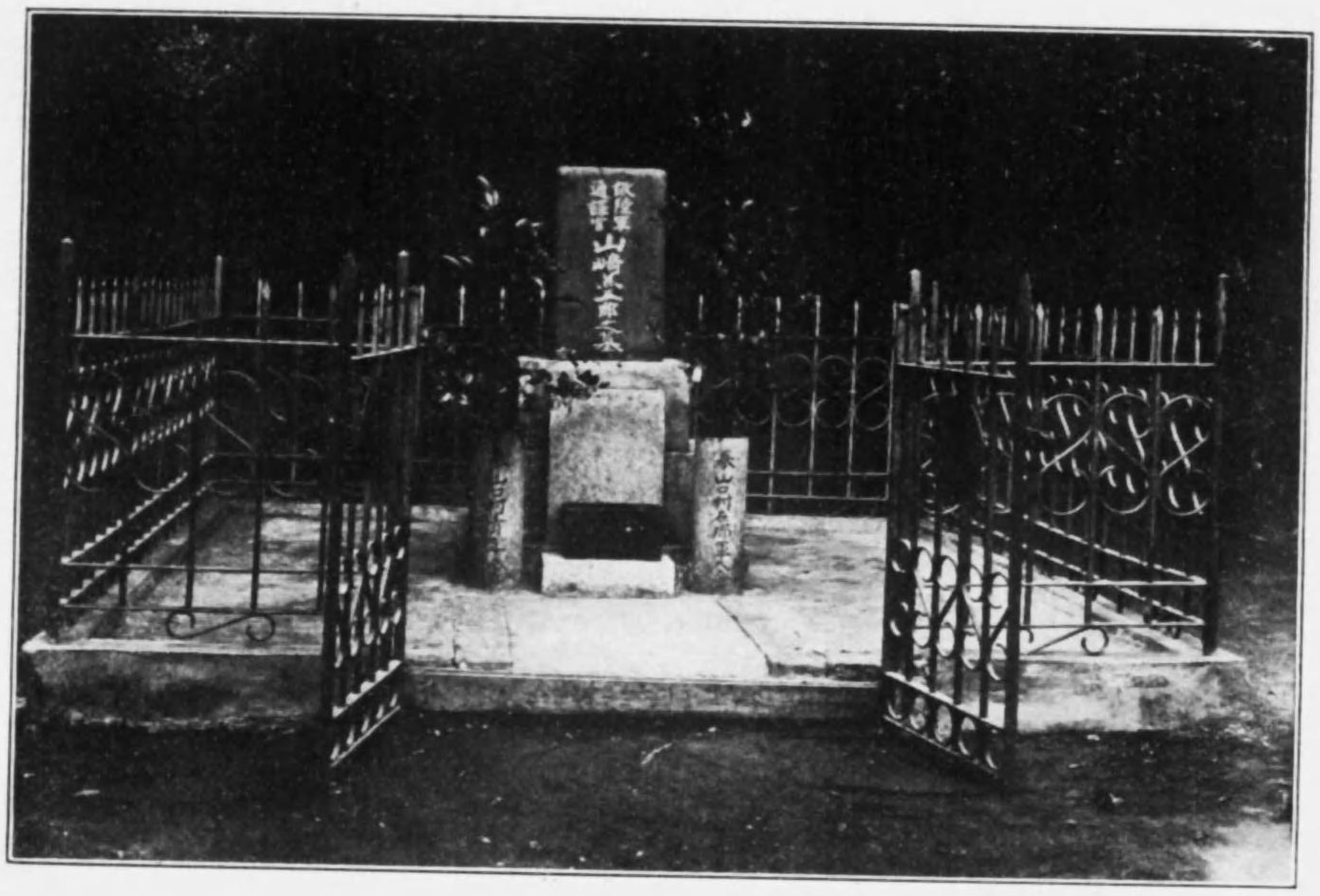
特234
776

正誤

頁數	行數	誤	正
二八	二	井上秀次郎	井上保二郎
三七	二	即ち君の墓背に	即ち墓背に
四六	一二	圓通院(淨土宗)	圓通院(濟宗)

山崎羔三郎君眞影

鞍手郡山口村小學校庭所在記念碑



鞍手郡山口村圓通院境内墳塋

荒尾精先生眞影

藤崎秀君眞影

鐘崎三郎君眞影

序

明治二十七八年の戰役、皇軍全勝を收め、淸廷屈して和を請ふや、日本の聲譽勃焉として揚り、威武始めて振ふ。此時に方り、幾多の俊傑あり、草莽の間より起り、力を盡し身を致して報効の事蹟を留む。我同郷の志士山崎羔三郎君は即ち其一人にして且つ最も優れたる者なり。君少壯にして大志あり、夙に東亞の振興を策するを念とし、支那に入りて經營拮据すること多年。明治二十七八年の戰役生ずるに及び、挺先自ら奮ふて軍に投し極力盡瘁する所あり。大本營の鑑拔を蒙り、特別の任務を帶びて敵地に入り、節を全うして命を殞す。殉國奉公の志氣、寔に壯とし偉とすべし。天下萬人の嘖々として忠勇義烈と稱したる

は、固より奇とせず。而して郷國の士民禮を厚うし式を盛にして葬祭の典を擧げ、星霜久しきを閲して欽仰の情愈々深きを加へ、近ごろ更に追遠の法事を修め、或は豐碑を建てゝ遺烈餘芳を表す、所以なきにあらざるなり。

君逝いて今方に三十餘年。行實の記錄世に存する者乏しく、年月の移推と相伴ひ、事蹟漸く微ならんとす。後進の子弟之を憾むるの餘。生前の遺事逸聞を收拾して小傳を作り、序を予に求めらる。

予素と君と鄕里を同うして生れ。其人物と行實とを知ること久しく、國を愛し時を憂ふるに於て、心事また相契ぶ者あり。今や世道變はり人心移り、君國の事、人をして浩歎痛惜せしむる所二三に止らず。顧みて君の忠勇義烈を念ひ、慨然たるもの

甚だ多し、乃ち聊か感懷の一端を述べて序とす。

顧ふに、君の行實の如きは、今日の時勢に於て、世道人心を薰化するのみならず、永く百年に傳へて天下の風敎を裨補するに足る。遺事逸聞を收拾して此篇を作りたる後進子弟の勞また以て多とすべきなり。これ豈に唯獨り稱して一志士の小傳と云はむや。

昭和二年冬十二月

内田良平

山崎羔三郎君傳

目次

序説……一
家庭並に年少時代の行實……三
始めて支那に入る……七
支那內地の跋涉……一三
日清貿易研究所の創立及び一時の歸朝……一八
明治二十七八年の戰役起る……一九
廣島大本營の召還と軍事探偵の特命……二五
金州半島の上陸……二八
殉難の始末……三〇
遺體の發見並に收容……三三
三崎山の記念碑……三六

郷國に於ける葬儀……四一
祭文と弔辭……四八
死後の恩典……五八
三十三年の法事と山口村の記念碑……六一

山崎羔三郎君傳

木本盤之輔
壚川角太郎 著

序說

王政の維新成るを告げ、開國進取の鴻謨定まつてより六十年。今や國運隆々として、富强を鳴らし威武盛に揚り、世界雄邦の一たり。その由りて來る所の淵源を深く究むれば、久うして且つ遠く容易に概言し難しと雖、近く當面の事相に就て之を見る歟、明治二十七八年の戰役、支那と兵を交えて勝を制し、外は以て列國の視聽を聳動し、内は以て國民自ら己の實力と地位とを認識したるを始とす。要するに、近時に於ける國運の隆昌が、明治二十七八年の戰役と交渉する者多きに居るは、蓋し爭ふべからざる事實なり。人生れて此時勢に遭ひ此戰役に從ふ。一兵一卒の微猶ほ且つ家門の榮とし郷閭の譽とするに足る。況や東洋の形勢日支の關係に於て、早

く見る所あり、事起るに及び、軍司令部の特別なる撰抜を蒙り、重要の任務を帶びて出征し、生を棄てゝ國に殉す。遺烈餘芳永く天下に存して百年に傳ふべきなり、豈に唯一家門一郷閭の榮譽のみならむや。

山崎羔三郎君、身を我鞍手郡の山中に起し、少弱の時より奇志を抱き、奮ふて支那の大陸に入り、艱苦を嘗め辛勞を積むこと幾閲年。明治二十七年の夏、日支和を失するや、上海の客次より馳せて韓山に至り、我軍を助けて極力盡瘁し、大兵更に進んで海を越え遼東の地を攻るに及び、特命を受けて軍事探偵の重寄を負ひ、挺先敵境に入り節を守つて難に斃る。天下の士民聞いて忠勇義烈を嘆美して稱揚せざるはなく、郷國の人全力を擧げて葬祭の禮を修め、相競ふて其忠魂を吊したるは、固より偶然にあらざるなり。

爾來年移り時變はりて、郷國の人欽仰敬慕の情猶ほ愈々殷なる者あり。近ごろ三十三周年の忌辰を迎へて懇に法事を營み、且つ此機會に於て記念碑を建て、今の内閣總理大臣田中義一男爵誌文を撰せらる。然るに君の傳記に至りては、未だ一篇の成りたるを見ず、年月の推移に伴ふて近親故舊多く世を去り、記錄文書また概ね散

逸して君の事蹟漸く泯滅せむとす。我儕頗る遺憾とする所あり、淺學菲才敢て自ら揆らず、主として殉難の當時發表せられたる新聞の記事を收拾し、或は生前の交朋知音を叩いて、君の閱歴行實を探聞し、今玆に聊か小傳を作る。

たゞ搜訪甚だ缺け考證また乏しく、獲る所の資料斷片零碎にして、纔に君が事蹟の梗概を錄するのみ、脫漏尠からざるは論なく、時としては錯誤もあるべし、是れ編纂の事情に於て寔に已むを得ざるなり。幸にして君の閱歴行實の一斑を知るを能くせば、我儕の志は足れり、豈に敢て多く望むことを爲さむや。

家庭並に年少時代の行實

山崎羔三郎君は筑前國鞍手郡山口村の人、素と福岡の城市に生る、實は白水清八の子なり。

白水氏は藩主黒田家の重臣中老贈従五位大音青山の家に附屬し、世々八十石を食む。父清八人と爲り質直にして武藝を好み、最も槍術を善くせり。時を同うして濱與四郎あり、また最も槍術に長し、藩中第一の名を負ひ、特に用ひられて師範役た

り。而して濱と技を較して好敵手たる者、獨り清八なりと稱せらる。元治元年の秋京都に禁門の事變あり、黑田家また士卒を出して警備の任を執る。清八撰ばれて役に從ひ功勞あり褒賞を蒙ると云ふ、蓋し一個の好武士なり。

清八土生氏に娶りて四男二女を生む、君は即ち三男なり、元治元年七月四日を以て福岡養子町の家に生る、幼名瀧、後に羔三郎と更む。明治十七年歲二十三の時、祖母の意に依り、御笠郡筑紫村の人山崎茂一郎の遺跡を承け、是より山崎氏を稱す。

明治の初、維新の世變を經て、藩の士卒多く城市を出て郡村に入り、兵農相兼ぬるの計を爲す。明治二年君の父清八また一家を提げて鞍手郡山口村に移り住む、山口村は主家大音氏の知行したる采邑なり。君從ふて山口村の人たり。

明治三年二月二十七日、先づ生母土生氏を喪ひ、越えて二年、明治五年九月二十一日また父清八を喪ふ。是に於て祖母及び長兄致に依りて養育せらる。先づ長兄に就て句讀を受け、尋て山口村の小學に入り、また金生塾に入りて講習し、歲十三鞍手中學の始めて成るや、また移りて學べり。

君軀幹長大雄偉にして風骨凡ならず、性質沈毅にして剛勇、夙に不群の言行あり。父兄の風を傳へ好んで擊劍を修め柔道を習ふや、多くは稽古衣を着けず、嚴冬冱寒の節と雖、赤條々の裸體に面と胴とを用ひて竹刀を揮ふを例とせり。また常に惡戲を事として自ら喜ぶ、或は蛙を捉ねて食ひ、或は狗を屠りて啖ふ。村人厭苦すれども顧みず、嘗て誤りて邑豪の愛犬を屠りて尤められ、陳謝最も勉めて困みたる逸話を留む。齒漸く長し隣村の小學校に教鞭を執りたる頃の如き、常に類被を爲して途中を來往し、異容頗る人言に上れり。縣廳の學務課員奈良原到と云ふ人、特に來りて監察を加へ推問する所あり、君平然として之に對し、爾く役人然として威張ること勿れと言ひたりと云ふ。その磊落豪放にして尋常の禮數に拘はらざりし平素の風を思ふべし。

然れども學問の講習は幼少の時より勉めて怠らず、日夜孜々として力を致せり。當時學制猶ほ甚だ疎にして、山村は講學の道最も乏し。因て十七八歲の頃より、福岡に出でゝ藤雲館及び福岡中學に入り、或は老儒海妻甘藏筒井勝を師として漢學を修め、また英學舍に入りて英語を習ひ、傍はら玄洋社の子弟と交遊し、知見日に長し意氣漸く旺なり。尋で出でゝ九州の諸地方を遊歷し、南の方鹿兒嶋に至る。時に

西鄕南洲の子弟三州義塾を建てゝ後進の訓陶に勉め、また別に鹿兒嶋學校の設けあり、教育の事業頗る振ふ。君甚だ意に適する所あり、足を留めて籍を三州義塾に列らね、兼ねて鹿兒島學校に出入し、また特に師を求めて英語を講じ、傍はら地方の才俊と交遊して議論を上下し、稗益する所多し、而して三州義塾の業また遠からずして成らむとす。

適々鄕の祖母病に臥するの報あり。君傖徨として裝を理め、晝夜兼行して歸へり自ら湯藥を甞めて看護最も勉む。幸にして一たび癒ゆ、事稍々閑なれども、祖母君の再び遠く遊ぶを欲せず、君幼少の時より祖母の撫育を蒙り、恩愛の情甚だ篤し。乃ち家に留りて歡を承け、隣境吉川村小伏の小學校及び黑丸の小學校に教鞭を執り、自ら筆墨の資を給し侍養の道を盡すこと二年。此間絶えず福岡に出でゝ玄洋社の諸彥と交遊し、大原義剛、藤島勇三郎、木本峰次郎の三人と相比し、倶に鄕黨の俊秀を以て稱せらる。而して他の三人は專ら內政の革新を謀るを主として論を立て說を唱へ、念多く國權國交の事に及ばず、君獨り見る所を異にし、東洋の形勢に顧みて大陸の經略を言へり。後年海を越へて支那に入るの志は、蓋し早く此時に起る。

明治十八年六月、祖母病また發し、終に二十七日を以て世を棄つ。君時に歲二十四、哀痛禁し難きものあり、家人を助けて葬祭に勉む。已にして喪終はるや、慨然として志を立て、鄕を出でゝ上國漫遊の途に就けり。此頃歌あり。

今よりは稚心をふりすてゝ
雲井に高き名をや立てなん

君零丁孤苦の間に人となり、久しく僻陬の山中に居りたれども、意氣甚だ壯にして功名の志欝勃たりしを思はしむ。

鄕を出るの初、先づ京都に至り、泰西學館日曜學校等に出入し、專ら英語を修む。泰西學館に教師英人ハットソンあり、深く君の人となりを愛し器重して指導最も親切、君因て大に補益を得たり。尋て京都を去りて東京に出て、弘く同志を求めて諸方の士と締交す。是に於て始めて天下の人となれり。

始めて支那に入る

君の東京に出て同志を求むるや、時恰も帝國議會始めて開くの期、數年の後に迫り、政論漸く盛に興る。而して朝野の人齊しく內政の改革を唱へ、意を對外の事に

注く者稀なり。君は夙に東洋の形勢に就て深く見る所あり。自ら以爲らく、今や泰西の威力日に東漸し來り、宇內の大勢將に變せむとす。東洋に國を成すもの尠からずと雖、その能く西洋の諸國と相對して獨立を保つに足るは、纔に我日本と支那とのみ。然るに支那は夜郞自ら大として內を尊び外を侮り、文明の事理に昧らく世界の大勢を知らず、政令衰へて國狀微なり。斯の如くにして止まざれば我國また危し。故に支那若し助けて共に爲すべくば之を助け、若し終に助けて爲すべからずば、我國は自ら起つて西洋の威力東漸し來るに對抗し獨立を保つの策を講ずべしと、因て身を投じて支那に入り、彼國の事情を究めむと欲す。然かも天下の人多くは之を顧みず。適々荒尾精あり、眼を支那の經略に着け、力を是に致すの志極めて忠實なり。君一たび見て議論相合し意氣相投する所あり。また別に志を同くするの士十餘人を得て、平生の心事愈々振ふ。然れども支那の大陸に入りて事を爲さむとすれば、勢先づ資財の供給を必要とす。君は固より赤手空拳を以て起りたる人なり、計畫動もすれば齟齬して意の如くならず。また出てゝ諸方を放浪し、同志を求めて資財を募る。途次大和に至り、足を山邊郡二階堂村に留め英學を講習する一私塾を設け、子弟を集めて教授に從ひ、傍はら諸同志と聲息を相通して、徐ろに機會の熟するを待つ。已にして支那の事久く拱手傍觀し難きものあり、乃ち奮ふて海を越へむと欲し、一たび筑前に歸り、家兄及び二三の先輩同人に謀る。人々皆之を贊す。是に於て斷然策を決し、浦敬一北御門　　等の諸同志と相約し、後先支那に入る、君の我國を發したるは明治二十一年十月三十日歲二十五の時なりき。發するに臨み、歌あり。

蚊遣火の身は鋸屑となるとても
國のためには何か惜まん

亦た以て常時の心事を想ふに足る。

君海を越ゑて支那に入るや、荒尾精等と同く漢口に居り、日々砣々として支那語を練習し、且つ辮髮を蓄へ支那服を著け、勉めて彼の國民の風俗に倣ふ。志は深く內地を跋涉し探討を試むるにあり。書を家兄に寄せて曰く。

（上略）

昨年阪地を出發せし浦氏は、昨年五月頃同一に阪地を出發せし北御門氏、及び

熊本人河原氏（同氏は拙弟等と久く京阪の間に流浪し、一昨年東京に出て、木本の死せし頃京都出立大和なる拙弟の寓居に來り、夫より歸國、昨年正月頃渡漢したる人也）と共に、清暦　月　日即ち日本暦五月二十日頃、漢口出發、西北伊犁の西北隅に向け進みたり。此地は即ち露西亞の國境に接し現今は露國より北國境迄鐵道を架設せり。先般一たび露國の侵畧を蒙りしも、其後清露兩國談判の上回復する事を得たる土地にて、境上守護の要區に御座候。

抑々吾黨事を中土に欵起し、內亂爭離の日に當りて、隣邦鴟梟其隙に乘し、其慾心を逞せんと欲するは必然の事にして火を視るよりも明かならん。然らば此日に際し豫め之れが備をなすに非ずんば、啻に蚌鷸漁獲の災に陷るのみならず、毒を百世に流し東洋の大勢を誤ること必せり。而して中原逐鹿天下紛閙擾々の時、手を分ち勢を殺きて其防禦を爲すは、到底なす能はざるなり。故に今日より之を處する策を講ぜずんばあらず。浦氏等此行蓋し其意に出でたるものにして、外は專ら露國進入の衝を障害し、內は傍ら機に臨み變に應じ中原獲鹿の業を助けんと欲するにあり、然りと雖七八千里外の異域に入り此事をなし此務めに服するは、誠に重く誠に至難なり、而るに彼等奮ふて之れが衝區に當る、其精神の壯烈爽雄なるは嘉賞に堪へざる處なり。又浦氏等三人出發するに先ち、藤島大屋の兩氏は甘肅省蘭州府（此府は伊犁に入る途中にあり、漢口より六十日程を隔てり、此處に府城ありて學生多く集る）に至り、書肆を開かんと欲し、千圓餘の書籍を携へ發程せり。（此處にて跡より來る浦氏等と會合し、右書籍より得たる價金を浦氏等に渡し其費用となし、藤島氏は浦上氏等の一行に加はり大屋氏は其報告の爲に漢口に歸る約束なりき）

斯くて浦氏等は炎天を冒し千辛萬苦蘭州府に達し、大屋氏等の書廛を百方探索するも見出す事能はず、依て一小屋を借り之に詫居し、兩氏の來るを待つ事三十日餘（三人共言語通ぜず、故に日本風にて旅行器を所持せり）而して尙ほ來らず、因て思らく途中必ず變あり恐くは賊手に仆れしならんと相議して、浦氏一人漢口に歸り、事業費を整へ再び來らん、而して北地寒冷將に堆雪に及ばんとす、以て北行すべからず、正に明年（即ち本年）舊五月十日を期し、再び此府に相會せん、物議に係る處其期に至る迄相散離せんと、依て北御門氏は北京に向

ひ、河原氏は往く所を知らず。斯くて日本暦十月二十九日夜、浦氏は漢口樂善堂に來着、北御門氏も北京に着したる由、頃日聞及べり。又た大屋藤島兩氏は浦氏に先ち出發せしが、途中旅費缺乏進退谷まり、漸く襄陽に止り、開廛漸く費用の貲を得て九月某日蘭州府に出發せしも、是れ浦氏等蘭州府退散の二三日前なり。兩氏夫より蘭州府に在り、本月(即ち一月)四日の夕、相共に漢口に歸れり。是れ等の齟齬より終に昨年は西北邊に手を伸ぶる事能はず、空しく經過せり。浦氏等大抵舊二月頃より蘭州府に向ふ豫定なり。右悉く秘密に屬す、乞ふ意を用ひられんことを(下略)

一月十七日　　　　山崎羔三郎

家大兄閣下

按ずるに、此書は明治二十二年一月に作る所、即ち始めて支那に入りしより猶ほ半歳に滿たざる時なり。專ら諸同志の動靜を叙したれども、相俱に力を致したる計畫の一端を考ふるに足るのみならず、支那國境の守備を說き露人の侵略を豫め虞りたるが如きは、その用意の深遠なりしを知るを得べし。

支那內地の跋涉

君漢口にあり、日夜孜々として語學を修め風俗に習ふこと二年。辮髮漸く長し、言語漸く熟し、粗ぼ稱して彼の國人と爲すに堪ゆ。此間また出でゝ傍近の地方を涉覽し、廣東人若くは福建の人と稱し、自ら名を命じて山致誠字は子羔と云ふ。然れども敢て怪む者なし。乃ち深く南方の內地に入り、人情習俗を視察し、傍はら日本人の根據地を索めむと欲す。明治二十二年の冬十二月、鎭江、揚州の暫遊を終はりて漢口に歸へり、家兄に寄せたる書之を悉くせり。

(前略)去る十一月漢口より鎭江及揚州の旅行途中無事甚だ愉快の旅行仕、一昨二十九日歸堂仕り候。途中別に支那人に見顯さるゝ事無之、拙弟の姓名は山致誠字は子羔と稱し候。住所は或は福建人と云ひ、或は廣東人と呼べり。却說拙弟等の事業は既に至難至艱の業にして、前古未だ有らざる大事を圖りたる事故、非常の困難艱難は甘んじて受くる覺悟に候へ共、兎も角其の端緒に就くこと甚だ困難にして一進一退未だ望を附する塲合に立至らず、誠に焦心至極皆々千思萬慮の淵に

沈み居り候。拙弟兼て心中に決する所あり、到底我同志者の事を成就するには、第一着の目的即ち之が根據地を得るに在ることを斷定仕候。

然るに此根據地即ち割據地を得る事、實に至難にして、支那天地廣しと雖も、甚だ得難き事に候。雖然邊境政化の洽からざる地を周遊し、一心に捜索することあらば、又地肥風土の便に依るべき處無きにしも非ざるべし。之を得之を占むることを得るに至ては、其地に割據して普く世の志士壯夫を集め、生養訓練以て世機に乘ぜば、大事業豈亦何の難きことかあらん、方さに腐敗の清朝を厭することを得る可きなりと常に思慮を定め居り候。

然るに未だ時宜を得ず、又た南北何れを擇ばんや未決なり。然るに兼ねて申上置きたる北邊行きの事、來年初夏に大概決行致す可し。北方は土肥之機應便を得ると雖も、本朝清廷の基業地にして、政化兵機隨分密に行屆き候に付、其地に潛伏して根據地を築く事甚だ困難なり。因て南邊の安きに如かざる可しと確案仕り候故、來年北行の期に至る迄、南邊に周遊して其地勢を窺ひ其地利を審査せんと欲し、用意粗整ひ本年中に孤劍飄々南邊に飛遊せんと決心仕り候。昨二十九日歸堂したりとは云へ、本年も只だ一日の餘日あるのみ故、來年一月四日を以て發程の起算に候。此より南雲煙萬里湖南の水貴州の山雲南の野廣西の森福建の郊虎狼豹豺の窟に入り、猺獞(是れ貴州雲南廣西に住する野蠻の名)苗蠻の巣に遊び、瘴癘毒害の間を彷徨して以て決志を達する事を勉むべし、前途渺茫無事なるを保せず、若し幸に神明の加護を得昊天の祐を受けば、本年中に再び上海に達する事を得べし、男子の事を成す豈容易ならんや、方さに粉骨碎身を甘んず、此行實に自ら壯なりと存じ候、愉快雀躍の至りに御座候。別に臨み再言す。家兄乞ふ自愛せよ。拙弟も誓て艱難に打勝ち凱歌を奏して歸る可し。若し志を達し好根據地を得る時は、直に上海に歸り、之に處する準備を爲すべし。亦た南邊志を得ざれば、來年方に北胡に向ふべし、秘密を願ふ。(下略)

十二月三十日　　常　致　誠

白水家兄大人

君が支那に於ける事業經營の第一義として計畫したるは、日本人に適當なる好個の根據地を得て先づ基礎を定め、徐ろに風雲の變を待つにあり。而して支那の北部

は滿清の朝廷創業の地域なるを以て、政令敎化割合に善く行はれ、乘じて根據地を得ること容易ならず、故に先づ南方を涉歷して觀察を試み、南方若し不可ならば更に北遊せむと欲するにありしを思ふべし。

此書に謂ふが如く、一月四日を以て南遊の途に上りしか否は明ならざるも、歲の初に於て行を啓きたるは蓋し事實とす。

發するに臨み、同志を顧みて曰く、斗大の膽鶴長の脛は天の我れに賦する所なり今此扮裝と此言語とを以て程に上る、前路何の難きことかあらむ、諸君幸に多く意を勞する勿れと、意氣昂然として出づ。

南方探討の情況は、紀行を失して今その詳細を知る能はず。傳ふる所によれば、行々或は賣藥商と稱し、或は儒醫と稱し、時としては賣卜者となりて諸方を遍歷し、往々にして山野に露宿したることあり、數日の間飮食を絕つて飢餓に苦みたることあり、また地方の吏胥に拘致せられて酷遇を受け、百方辯疏して纔に免れたることあり。備さに艱楚を嘗め困難に飽けり。然れども堅忍して屈せず、遠く雲南貴州の僻境にも入りたり。人稱して支那の領土二十一州の內その足跡を印せざる所、纔に數州に止ると云ふは、遍歷の日數より見て、或は誇大に失するの說ならむも、一年餘の間、南方支那の大部分を跋涉したるは、蓋し爭ふべからざるなり。二年の後一たび歸朝するや、暫く故山の草廬に幽居し、筆を執りて行水日記の著あり、南方探討の情況を錄すること極めて詳密なりしかど、惜哉その遺稿の在る所を失ひ、今之を見る能はざるは最も遺憾とす。

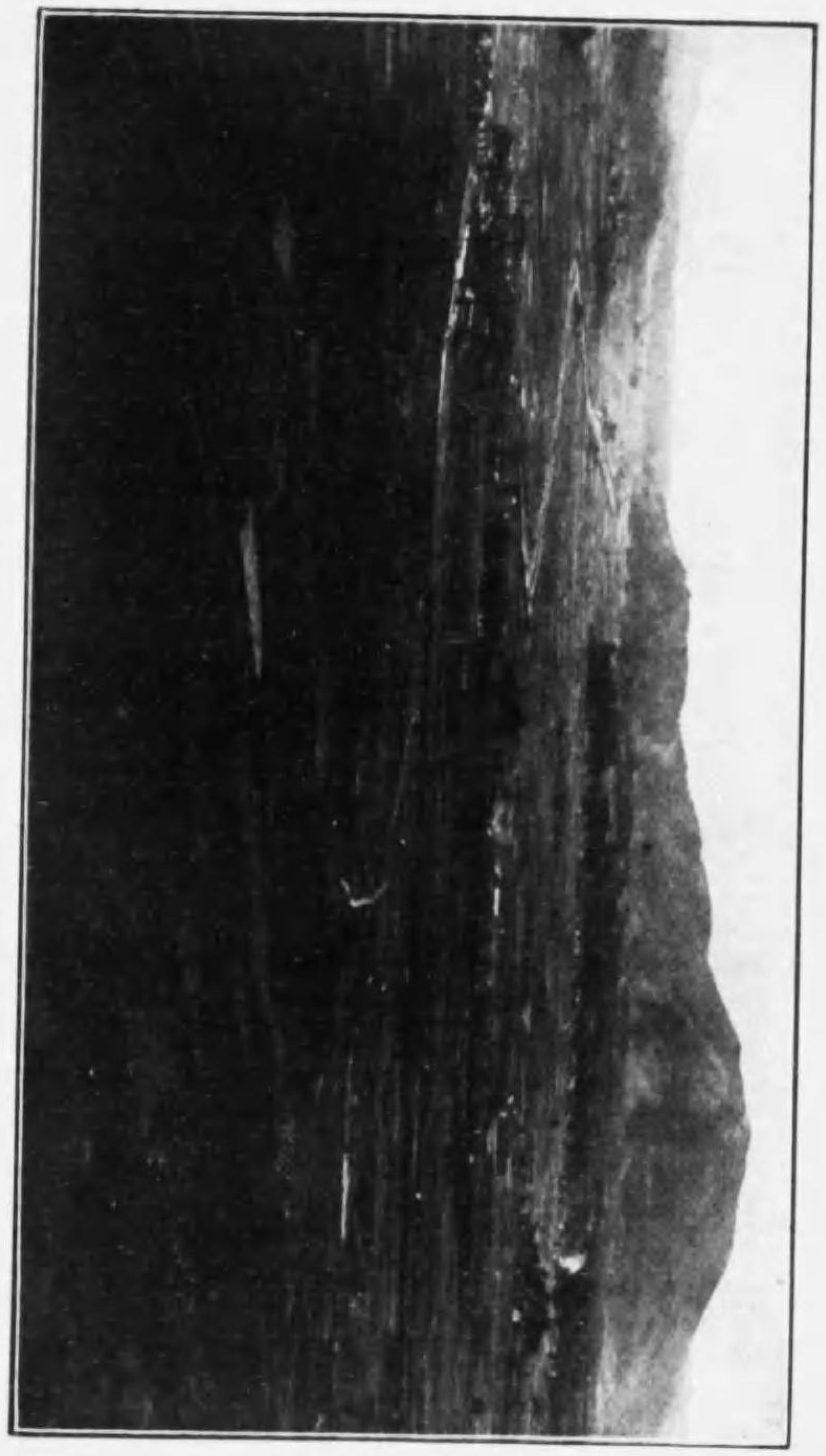
顧ふに、君の暫遊したる鎭江楊州の地方の如きは、元來開港場に近く外國人の來往も稀ならず、且つ文化の開けたる所なれば、その旅行の愉快にして困難なかりしは多く異とすべからず。山致誠字は子羔の名を用ひ、廣東若くは福建の產と稱して嘗て疑訝を受けざりしは、扮裝言語の老熟したるを考ふるに足る。然れども猶ほ日本人たるを掩蔽したる秘密の旅行に屬す。その艱苦の尠少ならざりしは、自ら察せらるゝ所なれども、一言の之に及ぶ者なく、行樂悠々の狀なり。斯かる艱苦は平然として應酬し、毫も意に介すること無かりし風を思はしむ。今それ南方遼遠の跋涉に至りては、道途驛亭の困難推して知るに餘あり。此間に根據地を索めて後日の風雲を待たむと欲し、自ら之に當りて千辛萬苦を辭せざる志氣の壯烈は最も驚嘆すべ

し。一旦日支和を失ひ兵を交ふるの時、直に起つて萬死の危境を冒し、奮ふて身を献じ國に殉じたるは固より奇とするに足らざるなり。

日清貿易研究所の創立及び一時の歸朝

君南方支那の探討を終はり、長江を下りて上海に到るの日、荒尾精根津一等の人々相謀り、力を戮はせて日清貿易研究所を上海に設け、講習生を募りて後來の計を爲すの畫策方に熟したるを聞く、乃ち欣然として贊し盡力する所あり。その經營緒に就くや、入りて所員となり專ら庶務を掌り、且つ支那語を教授して功勞多し。然るに研究所の事業擴張せざるべからざる者あり。更に講習生を募るの必要を感ずること最も切なり。君乃ち荒尾等の意を受け、明治二十四年の春を以て一たび歸朝し九州の諸縣及び三府並びに常總の地方を奔走して遊說に勉め、講習生を募る。然れども天下は内政の論爭に忙はしく、朝野の人他を顧みるの暇なく善く君の言論に耳を傾くる者を見ず。

此時家兄山口村より移りて隣邑吉川村にあり。君小閑を偸み歸りて家を省し、暫



山崎氏郷閭の眞影

く大鳴山の麓に幽居して筆硯に從ふ。支那の遊踪を錄して行水日記の成るを告げたるは、即ち此時の事とす。適々病あり、出てゝ福岡の縣立病院に入り療養すること累月、幸にして癒ゆるを得たり。

是より先、荒尾清上海より書を寄せて君の入支を求むること數次なり。君因て病やゝ癒ゆるを待ち、乃ち起つて上海に航し、ふたゝび荒尾と相合す。實に明治二十五年六月なりき。是より後また支那に留ること二年。上海漢口の間を來往して明治二十七年の夏、日支事を構えて和を失ひ朝鮮に於て兵を交ふるの時に及べり。

明治二十六年の十月、君一支那人と相謀り、漢口に寫眞店の業を開き行々衣食を給するの計を立てゝ徐ろに經略の策に資するを期し、鋭意盡力する所あり、施設漸く緒に就かむとす。越ゑて翌年の夏に及び、朝鮮の飛雲急を告げ、日支の間違言を生じ、互に出師の報あり、干戈相見るの危機方に迫る。君乃ち蹶起して支那より直に朝鮮に入れり。

明治二十七八年の戦役起る

朝鮮の警報支那に至るの時、君事を以て上海にあり。之を聞き奮然として曰く、我徒事を成すの機會來ると、言下に蹶起して意を決し、適々上海にありたる稻垣滿次郎と船を同うして先づ芝罘に航し、芝罘より稻垣と別れて朝鮮に航し、仁川より上陸して京城に入る。

此時支那兵既に上りて牙山にあり、我軍また京城龍山の間に屯し、頻に攻略の策を講す。然れども未だ敵營の情形を審にせず。君乃ち久く神戸にありて藥種商を營みたる支那人と稱し、幾多の苦心を費して牙山の市街に入り、留ること數日勉めて敵營の內狀を偵察し、歸りて龍山の混成旅團司令部に報告する所あり、我軍始めて敵營の兵數配置、銃砲旗幟等の概要を知るを得たり。而して我國の廟議硬軟二樣の論ありて和戰容易に決せず、大鳥公使京城に於て爲す所なく荏苒空く日を彌る。支那は戰意已に定りたれども、出師の準備未だ整はず、故に開戰の期を緩べて兵仗機械の用意に勉む。是を以て我は早く兵端を開くに利あり。君は當時の京城に於ける同感の志士と力を戮はせ、熱心に此說を提げて策動を試み、速戰の斷行を促せり。時局の進捗君等同志の主張與りて力ありと云ふ。當時の事情明かならざるも、同志

田嶋安之助の上海より君に贈りたる書あり、隱微の間また自ら君等の策動と相照應せるものの尠からざるを思はしむ。田嶋の書に曰く。

再度有益の御報道被下忝奉存候。特に此度は深く虎穴に踏み込まれ候との御報道、誠に得難之處に御座候。御探險之結果支那兵の事につき、從來世人の抱きし疑も相晴れ可申奉存候。

大鳥氏京に入りて既に三十日。今に至つて斯る間ぬるき懸念致候由慨嘆之至に候。今日に至りて一日の猶豫は邦家一日の損に候。支那に是迄戰爭の用意なく萬事不整頓なりしは、足下も定めて御承知の事ならん。然るに談判久しきに亘る爲最早大分用意相整ひ候樣被考候。例へば石炭の如きも、初めは當上海市場非常の拂底にて、招商局抔大困りの由に有之候處、其後續々輸入有之（重に三井の手を經たりと云ふ）既に四萬噸計り這入りし由。又銃器の如きも南北洋共豫備の分無之候處、近々歐洲より大分到着致候由、何人の目にも日本の最も勝る處は、出師準備の整頓せる事なれども、斯く談判久しきに亘り候而は、よし開戰になりても、我の一長は用を爲さゝるに至る事必せん。

定めて聞及びも可有之候、去る二月(西暦)總理衙門にて對韓攻軍に付會議有之候由、會するもの六人、其中に慶郡生一人平和論を唱へ、餘は皆主戰論に候由福昆の如きは平和論なりしも、主戰論の勢强きを見て遂に口を開かざりし由、右の次第にて主戰論に決せしかば、是より先き朝鮮にて大鳥公使と談判せしむる積りにて特派せし使臣(姓名官名共忘れたり何部かの侍郎なりと覺ゆ)は、已に發して天津迄至りしも、中途より呼戻し候由、又李鴻章は此以前旣に戰論を唱へしも(李鴻章は始め平和に事を收めんとの主意なりし事は御承知なるべし)內閣の爲にやけ腹を起せし由なれば、最早や主戰論に向つて有力なる抵抗は何れよりも出でざるべし。去れば淸國政府は主戰に決せりと見て差支なからん。尙平和を欲するが如き事を申込むは、是れ只戰爭の準備を爲す時日を得んと欲するのみ。去れば大鳥公使の談判も宜しく單刀直入に敵喉を刺すべし、豈因循猶豫敵の術中に墜つべけんや。近々劉銘傳當地を經て天津に赴く由、當地の西家新聞に由れば、袁世凱朝廷に請ひ彼を起して朝鮮の軍務を都督せしめんとしたるに據る。

劉永福も數千の舊部曲を嘯集して開戰の曉に御用を勤むべしと李鴻章に申送りし由、服部政太郎氏へ其の後漢口にて不圖寫眞の注文あり、五六十圓得し由にて先日來申、目下津川氏寓へ滯在致し居られ候、同氏は今一度漢口又上海にて開店致し度志願の由なれども、目下朝鮮事件の爲め當分見合せ候模樣に候。家方は先日諸方視察の爲め芝罘へ向ひ海路出發致し候。時下邦家の爲め折角御盡力所祈御座候。匆々拜答。

田嶋安之助

山崎羔三郎仁兄大人

江南機械局は目下夜業致し居り候。郭寶昌南洋水師提督に任ぜられし事は、已に御承知の事と存じ候。彼と云ひ劉銘傳と云ひ、劉永福と云ひ、髮賊當時の殘り株續て頭を擡げ來る。

此書、日付を缺ぐを以て君の之を領受したる時は明かならざれども、冒頭の語により牙山の敵營を偵察したる後なりしを知る。

已にして我軍進攻の策決し、混成旅團南下して牙山に向ふ。君用ひられて旅團司

令部の通譯となり軍に從ふ。斯くて我軍戰を交ゆ、一擧にして牙山成歡の敵兵を掃蕩し劈頭先づ全勝を收め、八月五日龍山に凱旋す。此役君が事前の偵察最も與りて功あり。

君の嚮に支那人を裝ふて牙山に入りたる當時、數日留宿したる逆旅の主人、我軍中にありて君の面を記し、君の支那兵と對座して飮食を倶にしたるを知れり。今や君の我軍隊と混處し、銃劍の間に居るを見て驚ろき、急に近いて相語らひて欲する狀を示せり、然れども其言ふ所の何の意たるを解する能はす、蒼徨として別れたりと云ふ。君此役に從ひ、意氣甚だ揚る者あり、戰始めて起るの日、深く敵陣に入りて我軍と相失すること一夜。翌旦本隊來り合するに及び、出てゝ司令部に至る。大島旅團長以下諸參謀、君を見て喜んで曰く、昨日君が銃を肩にして戰線に入りたるを聞けり、然るに歸來せず、途にして支那兵の斃れたるを目すれば、風貌頗る君と肖似せり、君また或は死したる歟と爲して憂慮せり、今や恙なきを知ると、乃ち交々相慶せり、亦た當時の情況を想ふべし。

牙山成歡の戰竣はり凱旋したる後、君は龍山の兵站部に附屬す。尋て我軍北征し平壤攻擊の戰あり、君また之に從ふ。出征の途中赤痢を患ひ、開城に留りて養ふこと數日。病やゝ癒ゆるを待つて復た發し、黃州に至りて本隊に追及し、是より或は敵情偵察の任に當り、或は糧食徵發の事を執り、平壤陷落の時は、專ら俘虜の檢問に從ひ、終始勤勞して最も多く我軍の用を爲せり。

君世故に慣れ事理を明かめ變通の才あり、且つ力を支那語に費し、練習の功を積みたるを以て行動機に適し、措置皆宜しきを得、徵發の如き最も工なりしかば、我軍多として之に任し、概ね指揮命令せすして君をして自由に働かしめたり。君また奮ふて事に當り、往々深く危境を犯し敵前に入り、數日を經て歸らず、時としては道を失ひ、菜根の北に向ふて繁げり、風の北を指して行くを檢して方向を知るの奇事をも試みたり。故に大島旅團長の如き、特に君を器重し、嘗て戒むるに自ら愛惜し、好んで死地に投ずる勿らむことを以てしたりと云ふ。

廣島大本營の召還と軍事探偵の特命

平壤陷落の後幾ばくならず、急に歸朝の命あり。十月四日歸りて廣島の大本營に

至り、留ること十餘日。八日を以て陸軍省の雇員となり、通譯官に補し、第二軍附屬を命せらる。任とする所は軍事探偵にあり、斯くて軍司令部の參謀會議に出て諮問に答ふるの機會を與へられ、また參謀總長有栖川大將宮に謁し、親しく秘密の訓令を授けらる。是に於て乎、忠奮の情報效の念愈々振ふ。

此時出征の期日迫り事急にして、鄕を過ぎり家を省する能はず、歸朝の途次、下關より書を家兄に寄せて狀を告ぐ。

拜啓、益御健全と奉存候。小弟も無恙從軍致居候處、今回至急の要事有之本日當地着、直ちに廣島大本營に向け出發致し候。四五日間本國滯在の後、再び渡韓致覺悟に候條、多分御拜顏を得ざるべし。彼地戰況等は實に詳細御聞に達度存候得共、如何せん時日無之其意を得ず殘念に候。向寒の候折角御自愛可被下奉願候

別に些細の物御送り申し度存じ候へ共、何れ廣島より歸途福岡には一寸立寄る考へに候條、其の節に可讓候。餘は後便に托す、先づは歸朝早々御起居御伺まで、草々。

十月二日　山崎羔三郎

家兄閣下

若し要事とも有之候はゞ、福岡井上姉樣の處に御書面被下度、左すれば小弟福岡に至りしとき、同氏を訪問可致候。

家兄は書を得て君の歸朝したるを知り、自ら弟健吉を携へ、君を廣島に見て別れを叙せむと欲す。而して未だ到らず、君は十日を以て重ねて書を家兄に寄す。

拜呈、馬關より捧上の書翰は御落手と奉察候。其時は是非一度歸國仕り訣別致す考に候處、大本營の命令に依り其時日無之、不本意ながら歸國は相止め候。此度は特別の任務を帶ふべき命に候條、隨分危險の方向に進發すべく、乍併數年の宿志粉骨碎身自ら甘んずる處、奮て其任に當り候。大概出發は本月十五日頃なるべし、小弟所屬は第二軍司令部に御座候間、向後健康に在陣致候はゞ、書狀も相送り可申、又た御賜書の時は同處の名宛になし置き被下度候

十月十日　山崎羔三郎

白水致樣

家兄は君の將に出發せむとする間際を以て、弟健吉と共に廣島に到りて相見るを得たり。季兄井上秀次郎また次て到りたれども、後れて會ふこと能はざりしは遺憾なりき。時に交朋知音また往々廣島に來る者あり、餞宴を設けて之を送る。君語りて曰く、此行固より生還を期せず、發途の日は即ち我が命日なり、事の成敗は天にあり、唯潔く死して名を辱めず、以て皇恩に報ゆるのみと、意色甚だ決せり。

金州半嶋の上陸

十月十六日、第二軍司令部に從ふて廣島を發す。船下關を過る時、先輩頭山滿、平岡浩太郎、進藤喜平太以下、鄕國の交朋知音多く來りて行を送る。十九日朝鮮の大同江に寄航す。君また書を家兄に贈る。

出帆の節は遠路態々御來臨を蒙り奉深謝候。小生海上無事本月十九日午前七時二十五分當地に入港仕候、艦隊は三艦隊共當地に碇泊罷在候。

種々御配慮を蒙り、御禮旁一書拜呈仕候、尙時節柄御自愛專一に奉祈候。

十九日午後六時　山崎羔三郎

白水致様

白水健吉様

これ君の殉難前十日の作る所にして、實に絶筆とも稱すべきものなり。君幼にして父母を喪ひ、祖母と家兄との撫愛を受けて成長し、恩情最も深し、東奔西走の境南船北馬の間、絶えず音信を通して候問するを常とせり。今や猶ほ此書あり、その眷々として忘るゝ能はざりし無量の心事を思ふべし。

斯くて二十三日の夜、始めて支那盛京省の金州半嶋に至り、直に花園河口より船を去りて陸に上れり。

船を去るに臨み、軍司令官大山大將以下諸將校に謁して別を告ぐ。大山大將見て壯なりとし、手を握りて優勞し、勵めしむるに重任を以てす。君慨然として旨を領す、傍より觀る者、皆容を動かして感激の色あり。

此夜、陸軍の參謀神尾光臣少佐及び同僚鐘崎三郎、猪田正吉の三人と小舟を同うして上陸す。而して第一師團附屬の通譯官藤崎秀大熊鵬向野堅一の諸人また上陸し任務を分ち部署定まる、君の擔當する所は、普蘭店より遼陽の近傍に渉る敵情を偵

察するにあり。翌二十四日の曉天、服裝早く成り、午前十時、他の諸同僚に先だつて發す。發するに臨み、諸參謀と握手の禮を交換し、告げて曰く、此行奇功を立つることなければ、再び生きて諸公を見ざるべしと、乃ち飄然として辭し去れり。

今の內閣總理大臣田中義一男爵、當時まだ從ふて第二軍にあり。親しく君の行を送りて善く狀を知れり。近ごろ君の記念碑の誌文を作り言及して曰く、顧ふに征清の役、予亦職を奉じて第二軍に在り、君の特別任務を帶びて敵地に向ふや、予其行を壯とし、手を携へて共に營門の外に出て目送するもの之を久うすと、亦以て情況を想ふべし。

殉難の始末

君出で去りてより後、消息暫く絕え杳として知る所なし。已にして翌十一月六日、我軍金州城を陷れ營內の文書を檢するに及び、君が二十六日を以て支那の巡邏兵の捕獲する所となり、金州副都統衙門の獄舍に拘禁せられて終に身を致し、別路を取りたる鐘崎藤崎の二人、また同一の運命に陷りたる證跡を得たり。

是より先、彼我己に戰を宣し、我軍將に來襲せむとする報あるや、金州副都統連順は、檄を管內に榜示し、倭寇奸細潛入甚多來往嚴視捕拿重賞の令を布き、また哨兵を各處に置き、日々巡邏して不虞に備へ、且つ赤符を自國の行商に頒つて標識とし、警戒甚だ嚴密なり。支那人にして赤符を所持せず、誤りて日本の間諜と認められ、斬殺せられたる者十餘名を算したりと云ふ、因て我が通譯官また免れざるを致せり。

君等の捕獲せられて死を遂げたる事實は、敵人の文書に徵證を發見したれども、殉難の情況と遺骸の所在とは、全く之を知ること能はず。翌年の春、戰局漸く進み我軍連捷して威武遼東を壓するに及び、第二軍司令部に雇役せらるゝ支那人王某あり。嘗て捕はれて君等と海防分府の獄舍を同くしたるに依り、君等の殉難の情況始めて明白となれり。

君は二十六日碧河流の渡口に於て、敵の巡邏兵姓張なる者の爲に捕へられ、鐘崎氏また同日碧河流の近傍に於て、滿洲騎兵の統領依克當阿の部下に捕へられ、藤崎氏は三十日同く碧河流の邊に於て、土民の捕ふる所となり、共に金州廳に檻送を受

け、海防分府の獄舍に投せられ、頻に我軍の消息を鞠問せられて鞭韃呵責を蒙り、備さに艱楚を甞めたれども、各々その終に掩ふべからざるを知り、自ら日本人たるを公言し、速に死せむことを求めたる外、敢て言語を發せず。君は唯我は大日本帝國福岡縣の人なりと稱し、大聲呼んで曰く、速に首を斬れ、我何ぞ死を畏れむやと、神色自若として平素に異る所なし、獄吏また豪膽に愕くの狀あり。三十一日の夜十時頃、副都統衙門の洋槍兵十數人來り、三氏を車に乘せ金州門外に至りて之を斬る。

地は金州の西門を距ること二十餘町にして、俗に殺人廠と稱する處、旅順街道の右側にあり。支那の習俗、人を刑するや、西南に向はしむるを例とす、故に此夜また君をして斯の如くならしめむとす。君却けて曰く、我は大日本帝國の臣民なり、天子東にあり、東向して死すべし。我輩死すとも魂魄は必らず故國に歸へる、何爲れぞ奴輩の指揮に從はむと、東向して動かず。劊手大に怒り刄を揮ふて頰を毆つ。君終に屈せずして斬らる。後に遺體を檢するや、頰上特に二個の刀痕あり、蓋し此時に蒙る所なり。亦た以て死に臨み氣慨凜然たりしを思ふべし。また云ふ、刑に瀕し、人あり憐んで水を與ふ、君拒んで飮まず。鐘崎藤崎の二氏曰く、此人我を敬するを知る、義負くべからずと、乃ち飮んで死せり。また各終はりに臨み態度從容たりしを示せり。君死する時、享年三十一、鐘崎二十六、藤崎二十三。

遺體の發見並に收容

我軍已に金州城の文書を檢し、君等三氏の殉難を知りたる後、百方力を盡して遺體の在る所を索めたれども得る能はず。空しく從軍僧の過去帳に俗稱を留むるに止りしが、支那人王某の說あるに及び、王某をして探索せしめ、始めて金州城の西門外に埋められたるを知れり。因て明治二十八年二月六日、君等と親交したる向野堅一澤本良臣の兩通譯官、王某を伴ひ往いて現場を按檢し、果して事實なるを認め、翌七日、陸軍の福田副官、掌吏、醫員、憲兵及び諸通譯を帶同し、往いて發掘し之を收容せり。

君等三氏は各々身首處を異にして駢死し、肉凍り骨碎けて慘狀見るに忍びざる者あり。三氏を辨明したるは、前齒一本缺けたるを以て君を知り、メリヤスの襦袢を着たるを以て鐘崎氏を知り、翠丸の稍大なるを以て藤崎氏を知れり。殊に藤崎氏の

脚部に纏ひたる布は、廣島を發する前日、向野通譯官と分割して用ひたる物なりしかば、向野通譯官一たび見るや、感傷の情禁し難く、涕涙潸々として哀痛し、傍人また斷腸の思を爲して正視する能はざりしと云ふ。

當時の遺體檢案書あり、悲慘を極めて殆んど讀むに忍びざるを感ずれども、また烈士殉難の實狀を考ふるに足るものなれば、勉めて玆に之を收む。

死體檢案書

明治二十八年二月七日午前十一時七分、西門外約百米突旅順口街道の北側に於て檢案す。

山崎羔三郎死體

頭部は頸部に於て體と分離し、二個の切創あり、左耳部より後頭結節に達する十仙米突、其半後頭部は後頭骨を傷け、前部の下方四仙米突の部に於て之と並行し、左口角より頂部に達する長さ十三仙米突の深き創にして骨に達し（但し頭蓋腔に達せず）其傷の口角端は上顎骨の一部を切離せり。創椽は鋭利にして哆開する事少し、斷端は第三頸推體を横斷し、前方は舌骨の上部に於て體軀を分離せり、他は腐敗と凍結の爲めに不明、全身血痕斑々たる支那服、上肢は背部に强き麻繩を以て腕關節部を互に緊縛し、四肢は凍結の爲め全く强直を呈せり。

頸部斷端は暗色頸推體の横斷面は食喉頭入口舌骨頤部軟組織を露せり、頂には斷端に並行せる二創、其上部は長さ八仙米突、其下部は頂背の間にあり、背の軟組織を創け長さ十二仙米突頸推に達せり、處々黒點を見る胸部最も多し、此外に疵なし、致命の原因は頭部の切斷。

鐘崎三郎死體

別段疵なし、切斷端は第四頸推の體部を横斷し狀軟骨の下椽より頸部の軟組織を切斷し、創口には暗色、離斷端に背推部の横斷面食道氣管の上部を現はし其他前の如し、致命の原因は前同斷。

藤崎　秀

頸部は軀幹と分離し、右耳の後上方に長さ四仙米突幅二仙米突の不正三角形の創あり、左下顎部には長さ十仙米突の淺き創あり、深さ皮下に達す。創椽哆開する事少く血痕を以て蔽はる。頭部の軟組織は腐敗の徵を呈し、又凍結す。斷

端第三頸推の體部を横斷し、前方は舌骨の下方に於て軟組織を斷絶せり。斷端には頸推體食道及甲狀軟甲を露す。殊に下肢に血液沈墜の爲め暗紅色を呈し、背部に黄色の黴を有す。致命の原因は前同斷。

三崎山の記念碑

第二軍に於て、君及び、鐘崎、藤崎二氏の遺骸を收容するや、二月九日金州城外崔家屯の一丘陵に、壇を設け禮を具へて之を祭る、第一師團長山路中將以下從軍の文武官僚式に臨む者數百人、孰れも其行動を烈とし、其志氣に感ぜざるなし。

遺骸は荼毘に附し、各分つて二と爲し、一は送りて鄕國に致し、一は留めて崔家屯の丘陵に葬り、三氏の姓氏皆崎字を用ふるに取り、地を名けて三崎山と稱し、墓碑を立て、題して大日本志士山崎羔三郎捨生取義之碑と云ひ、他の二人また之に準す。

已にして清國屈して和成る。適々露獨佛の干渉起り、撤兵還地の事あり。金州半島ふたゝび清國の領有に歸す。同志の先進根津一等、三氏の遺骸をして獨り他邦の版圖に留らしむるを欲せず、相謀り收容して齎らし歸へり、東京高輪の泉岳寺に改め葬り、根津即ち君の墓背に記して曰く。

征清之役、第二軍譯官山崎鐘崎藤崎三氏、以上將之命變服入敵地不幸覺斃毒刄、余建此碑於金州城北之山頂以表義烈、既而朝議還地撤兵、有司收此齎歸、乃更立泉岳寺傳諸不朽

明治丙申年四月　知人 根津一 識

後ち十餘年を經て、明治三十七八年の役あり、金州の山河ふたゝび租借地の一部として、政令我に歸せしより、來往の士庶また三氏の跡を弔ひ、其忠節を稱すること盛なり。大正の初、金州民政支署長遠藤盛四郎等、星霜を閲するに從ひ、遺跡或は泯滅するを惜み、同志十餘人と相謀り發起者となり、力を戮はせ貲を募りて、曾て三氏を葬りたる三崎山に、殉節三烈士碑を立て關東都督陸軍大將福島安正題字を作り、關東州公學堂南金書院の岩淵德也碑文を作くる。碑文に曰く。

殉節三烈士碑

我日本屹立亞洲、國體振古無竄、士風忠勇、愛國尊君、近世風俗、與時漸移易、然同

仇敵愾、此氣初未㆓少衰㆒、是所㆔以我國威震㆓燿寰宇㆒也歟、乃不㆓武夫戰卒顯㆓功於果毅㆒、以㆓布衣挾筴之士㆒、往々出㆘如㆓三烈士㆒者㆖、豈不㆑偉哉、三烈士者、筑前人山崎君羔三郎、筑後人鐘崎君三郎、大隅人藤崎君秀是也、三君皆少有㆓大志㆒、最勵㆓志節㆒、明治庚寅、荒尾精根津一等、創㆓設日清貿易研究所于上海㆒也、鐘崎藤崎二君渡㆑海從遊、山崎君既在鄂㆒、聞㆑之亦來共周旋、既歷㆓年所㆒、各有㆓心得㆒、於㆑是或渉㆓山川㆒、覧㆓城邑㆒、以察㆓地理風俗㆒、或締㆓交士夫㆒、潛㆓心時務㆒、或執㆓牙籌㆒從事懋遷、及㆓甲午役起㆒、與㆓同志㆒倶奮曰、是男子報㆑國之秋也、乃投㆑筆從㆑軍、先㆑是鐘崎君入㆓燕遼㆒爲㆑諜還報、時乘輿駐㆓廣島㆒、特召㆓見於行在㆒、山崎藤崎二君亦得㆑進㆓謁有栖川親王㆒、盖異數也、三君與㆓其徒㆒已授㆓陸軍通譯㆒、從㆓第二軍㆒、由㆓花園口㆒登㆑岸、銜㆑命偵伺、變㆑服深入㆓敵地㆒、備嘗㆓辛苦㆒、至㆓碧流河㆒、敵覺捕繫㆓于獄㆒、音耗遂梗、及㆔我軍克㆓金州㆒、檢㆓敵文書㆒、始知㆓三君遇㆑害、乃堀㆓城外地㆒、獲㆓其屍㆒、於㆑是設㆑壇具㆑禮祭㆑之、是日來行㆑禮者、第一師團長山路陸軍中將以下數百人、無㆘不㆑泣㆓其壯烈㆒者㆖、先㆑是土民告㆓三君殉㆑節狀㆒曰、三君拘㆓於獄㆒、拷掠百端、血肉狼籍、而毅然不㆑屈、竟無㆔一言泄㆓機事㆒、乃引出而斬㆑之、實明治二十七年十月三十日也、清國例、囚臨㆑刑必西向、山崎君憤曰、吾日本臣民也、天子在㆑東、不㆑可㆓西向㆒、且吾輩雖㆑死、魂魄必歸㆓故國㆒、東向不㆑動、行㆑刑者怒叱㆑之、不㆑聽、擧㆑刀擊㆑面、其屍面上有㆓刀瘢㆒爲㆑是也、鐘崎藤崎二君亦抗㆑節不㆑撓皆死㆑之、瀕㆑刑時、有㆑人憐㆓其壯節㆒、給以㆑水飲、山崎君拒不㆑飲、二君曰、此人知㆑敬㆑我、勿㆑負㆓其義㆒、乃飮㆑之、三君殉㆑節時、山崎君年三十一、鐘崎君二十六、藤崎君二十三、事聞㆓朝廷㆒、深嘉㆓其志節㆒各厚賜㆑賻、入㆓祀靖國神社㆒、火㆓化忠骨㆒、各分爲㆑二、一葬㆓其梓里㆒、一葬㆓於金州城北崔家屯㆒、取㆓於三君姓氏㆒、稱㆓其地三崎山㆒、墓前樹㆑石、題曰大日本志士捨生取義之碑、以誌㆓其忠節㆒、及㆓國家訂㆑約還㆑遼、改㆓葬于東京泉岳寺㆒、後十餘年、金州民政支署長遠藤盛邦等、恐㆓忠烈之遺跡久而湮滅㆒、胥謀立㆓碑山上㆒以圖㆓不朽㆒、屬㆓余文㆒、固辭不㆑獲、嗚呼三君死矣、其生時落々寡㆑合、乃感㆓義烈㆒、轗軻奔走、若㆘疾痛在㆑身而不㆑容㆓自已㆒者㆖、卒㆑之駿翮巾垂、不㆑得㆓一搏萬里㆒、豈不㆑可㆑哀也哉、然其精爽凛々者、固經㆓千歳㆒而不㆑滅、視㆘之夫軟熟功餂、苟徼㆓倖一時㆒、以自詡許者㆖、其相距何啻天淵哉、余恨無㆔如㆑椽之筆以表㆓彰大節㆒、謹叙㆓其概略㆒而系以㆑銘、

銘曰、

人誰無㆑死　處㆑死爲㆑難　舍㆑魚取㆑蹯
審擇㆓心安㆒　繫㆓吾三君㆒　英烈芒寒

芬々遼野　風雲蟠盤　前徽在レ玆

來髣攸レ歎　豊碑刋勒　永此聳觀

君等の節に殉したる刑場の跡にも、一碑あり、題して

鐘崎三郎

山崎羔三郎三士殉節之處

藤崎秀

と記せり。金州に遊ぶ人、憑弔徘徊して當時の事を想はざるはなし。彼の明治三十七八年戰役に實踐する所を述べて「肉彈」の一名卷を著はしたる陸軍の櫻井忠溫大佐近ごろ金州に遊び、紀行を作り題して「草に祈る」と云ふ。中に此碑を見るの一節あり。（昭和二年九月十五日發行大阪朝日新聞夕刊掲載）感懷多ければ、特に抄錄す。

辿り着いたのは、一本の楡の樹の下である。それは金州門外の畑の中である。楡の木蔭に一つの石碑が立つてゐる。碑面を見ると、鐘崎三郎、山崎羔三郎、藤崎秀三士殉節之處と刻んであつた。河野さんは金州城を越して遙に見ゆる山を指して、あすこが三崎山ですと云つた。見ると、その山の上にも何だか碑が立つてゐた。三人とも崎の字があるので、三崎山といふ名がついたのですといつた。

楡の樹の下には、蘭のやうな長い葉が、スク／＼と四方に手を出してのびてゐる。「馬食はす」に似た黄いろい小さな花が、そこらあたり一面に咲いてゐる。

こゝはもと死刑場で、このころは少しは家も建ちましたが、もとはたゞの原つぱで、こゝの土は血で眞黒になつて居たといひます。

三崎三人は、支那と戰爭が始ると、軍事探偵となつて、花園口から上陸し、金州旅順方面を偵察する途中、碧流河の渡場で支那兵に捕へられ、こゝで斬られたのですが、この淋びしい碑を見るたびに涙がこぼれますと、河野さんは莊重な聲でいつた。さう聞くと私も固くなつてしまつた。

同志六人あつて、今生き殘つてゐたのは、向野堅一といふ人ださうである。その人が三人の死體を搜がし歩いてゐるうちに、こゝに埋めてあるのがわかつた。掘つて見ると、耳を切られ眼を刳られて、二目と見られぬ姿になつてゐた。三崎三人は、いづれもその時二十三歳前後だつたさうである。

その斬られたところが、こゝなのである。

當年殉節の遺跡、永く行人旅客をして憑弔低徊の情に堪へざらしむるものあるを思ふべし。

鄕國に於ける葬儀

明治二十七年の十一月、君殉難の報先づ鄕國に至り、次で翌二十八年の春に及び遺骨家に歸へり來る。恰も交戰悉く我軍の勝利となり、支那屈して和を請ひ、國民首を擧げて遼東の天を望むの時なりしかば、平生君を識ると識らざるとに論なく、その忠烈を聞いて感激し、士民相謀りて葬儀を行ふの議を決し、郡の主邑直方町に地をトし、三月二十六日を以て式を擧げ、遠近より來り會する者數萬人、地方未曾有の盛觀を極む。事は當時の新聞記して詳なり。今こゝに概要を摘約して之を收む。

郡内の人、諸方の故舊知音と相議し、三月二十五日を期し、葬儀を行ふに決するや、玄洋社の朋友同人福岡より來りて事に與り、無數の篤志者、競ふて物を獻し貲を寄せて之を助け、力を戮はせて周旋する所あり、準備全く整ふ。然るに二十五日は拂曉より雨降り出てしかば、豫め決したる趣旨に從ひ、翌二十六日に延ばし、此日は晴雨を問はず實行すべしと定む。適々此日また朝來强雨あり道路泥濘を訴ふること甚だしく、當事者孰れも深く苦心せり。幸にして十時頃より雲開き雨歛まり日光を洩すに至りたり。一同喜びて事に從ひ、靈柩は豫め安置しありたる礒光村を出て、順路を經て直方の式場に向ふ、此間行程凡そ一里半。來りて葬儀に會する者、悉く之に從ふ。行列左の如し。

先驅警官警部一名巡査六名、紋付高張、白張提灯、造花大櫻、紅白錦旗、直方高等小學校生徒銃隊、福丸生徒高等小學校銃隊、直方福丸兩高等小學校生徒、山口村各尋常小學校生徒、吉川村尋常小學校組合內各尋常小學校生徒、他郡市學校生徒、直方尋常小學校生徒、勝野村各尋常小學校生徒、福地村各尋常小學校生徒、下境

村各尋常小學校生徒、頓野村各尋常小學校生徒、香井田各尋常小學校生徒、以上學校生徒全數約四千人、博多音樂隊、天理敎會寄附音樂隊、麻、榊、造花數十對、眞榊、紅白錦旗數十旒、神饌、辛櫃、祭官、副祭官、祭主(乘馬)、伶人(數十名)、大榊、銘旗警官警部(騎馬)、巡査(二名)、墓標、和歌記載の旗、刀、紋付高張、柩、警官巡査(六名)、護衛、喪主、僧侶、五色旗、大旗(眞宗寄贈)、大旗(眞宗寄贈)、香爐、紋付旗(眞宗寄贈)、錦旗(眞宗寄贈)、音樂(眞宗寄贈)、眞宗僧侶、(各自大傘之に屬す)、夾箱、六金色旗、香爐、造花、僧侶(淨土宗禪宗眞言宗日蓮宗の諸宗順を追ふ)、紋付高張、白張提灯、遺族及親族、知事代理片山收稅長、外縣官、各郡市長、師範學校長、監視區長、警部、小林區署、收稅署、裁判所員、遠賀川管理事務所、郡役所員、勳七等以下帶勳者、縣會議員、徵兵參事員、葬儀員三圓以上寄附者、各町村長助役、高等小學校職員、尋常小學校職員、新聞記者、赤十字社員、他郡市よりの會葬者、各軍人家族、所得稅調査委員、全郡町村組合會議員、組合役場吏員、各町村役場吏員、鞍手郡尙武會員、同郡軍人優待會員、嘉穗郡軍人優待會員、鞍手郡敎育會支部會員、醫師組合會員、玄洋醫會員、鞍手郡勸業會員、同郡農會員、白張提灯、造花、木屋瀨村各尋常小學校生徒、植木村各尋常小學校生徒、劒村各尋常小學校生徒、古月村各尋常小學校生徒、西川村各尋常小學校生徒、新入村各尋常小學校生徒、宮田村各尋常小學校生徒、福丸村各尋常小學校生徒、笠松村各尋常小學校生徒、中村各尋常小學校生徒、私立大之浦尋常小學校生徒、私立明善小學校生徒、以上生徒總數凡六千人、本郡青年會員、各町村夜學會員、山口村姉妹會員、眞宗會員、各町村有志者、

行列は斯かる次第を以て、蜿蜒として靈柩の前後に從ふ者、總べて三萬餘人、紅白紫黃の旗幟は翩飜として微風に飄へり、奏樂は瀏喨として淸音を送り、人は皆善く秩序を守りて儀列を紊す者なく、步武肅々として途中二時間を費し、直方の式場に着けるは恰も正午なりき。

式場は直方町の字古町の河原(遠賀川の上流)にあり。南北七八町東西二町、入口には極めて大なる綠門を設け、揭くるに仰景の二字を題したる扁額を以てし、大小無數の國旗幾十の球燈之を繞り、一望たゞ專ら百花爛熳の觀を成せり。綠門を入り北の方約四町にして假殿あり、一段高く壇を構ゐ、四方には障壁を設けず、中央に靈柩を安置し諸面より等しく仰望するに便ならしむ。綠門を入りたる正面に神官の席あり、左側

に淨土宗、右側に眞言宗、背面に眞宗、その他諸宗僧侶の席また此間にあり。會葬したる各階級の人々周圍を繞りて位置し、假殿の前方に葬儀委員の出張所を設け、一切の節制を掌れり。されば會葬者數萬人の多數に上り、儀式盛大を極めたれども終始秩序善く保たれて、無事に之を執行するを得たり。

正午靈柩式場に入り、諸員各々豫定の位置に就くや、儀式は左の順序を追ふて執行せらる。

第一軍樂吹奏　第二神職祓獻饌　第三僧侶燒香　第四雅樂吹奏（神職伶人及眞宗伶人）約一時間
第五軍樂吹奏　第六神職祝詞天理教會員祝詞　第七各宗僧侶讀經　第八遺族燒香約三十分間　第九軍樂吹奏　第十祭文獻讀　第十一學校生徒唱歌　第十二會葬人祭文並燒香　第十三天理教會奏樂　第十四埋棺の式

斯くて儀式全く終了を告げ、各員次を追ふて退場し、靈柩は翌日を以て山口村に移し、遺骨は聖香山圓通院(淨土宗)の塋域に葬り、浮屠氏謚して英哲院忠山義勇居士と云ふ。

葬儀の執行は數十日の準備より成り、遍く地方に知れ渡りしかば、遠郊近在より來り、通行の路傍に於て靈柩の過るを拜し、式場の傍にありて葬儀を觀る者、その幾萬なるを知らず。靈柩の四面には殉國者の大寫眞を貼布し縱觀に任かせしを以て、仰き見て生前の風采を想ひ、涙を揮ふて禮拜する人あり、直方の市街は、到る處國旗を掲げ造花を懸けて吊意を表し、一時は滿街幾んど總べて人を以て塡めらるゝの狀あり。式場の近邊には、十餘軒の露店を設け、覗眼鏡等の興行物さへ出でゝ恰も神社の祭禮に類するの奇觀を呈せり。此日、儀式の執行中は、間斷なく狼煙を發揚して五十餘發に及び、義烈英勳等の文字を現はし、夜間猶ほ續行するの準備ありたるも、式の終はる頃より雨ふたゝび降り出せしかば中止せり。蓋し筑前に於ては古來未曾有の盛大なる葬儀なりき。忠勇義烈の人心を感動すること極めて多大なりしを思ふべし。

葬儀の執行せらるゝに方り、當時の陸軍參謀次長川上操六中將、福岡縣知事代理片山恭平、鄕國の先輩頭山滿平岡浩太郎進藤喜平太以下、祭文を薦め吊辭を寄せて哀悼の意を表し、また幣物を捧げ金員を贈りて誠を致したる人、無數にして悉く列擧すべからず。今その祭文吊辭の一部を存錄す。

祭文と弔辭

祭辭

嗚呼忠なる哉山崎君、君夙に憂國の志を懷き最も敵愾の氣に富む。昨年征清の事起るや、奮ふて戎馬の間に奔走し、牙山に平壤に屢々偵察の功を奏し、更に金州半嶋に向ひ、大に報効する處あらんとせしが、不幸にして敵中に陷り、終に志を齎して逝く、嗚呼哀い哉。其死に臨み、毅然抗爭敢て東方を背にせざるか如き、凛乎として古烈士の風あり、以て千載に不朽なるべし、嗚呼忠なる哉。爾後我軍益進み、旅順に威海衛に海城に營口に戰ふとして勝たざるなく、攻むるとして取らさるなし、君亦以て瞑す可きなり。今其同鄉の士共に弔祭を行ふを聞き、同感の情に禁へず。玆に遙に一言を寄せて之を靈前に陳告せしむ。

明治二十八年三月二十二日

陸軍中將　川上操六

維時明治二十八年三月二十五日、福岡縣知事代理收稅長從六位勳六等片山恭平、謹て故通譯官山崎羔三郎君の靈を祭る。顧ふに淸國が隣交の誼みを破るや、王師遠征膺懲の典斯に擧り、山河震動草木風靡す。是時に當り、君通譯官を以て特別の任務を帶び、第二軍に從ひ深く敵地に入り、敵狀を察し、大に得る處あり、其我軍に利するや尠少ならず。不幸にして中途敵の捕ふる處となり、虐待酷訊到らざるなし。君毅然少しも屈せず、其將に斬られんとするや、敵人君を引て西面せしむ。君儼然容を正して曰く、日東大帝國は父母の邦なり、聖帝上に在り、我豈に西面せんやと辭色共に勵し、吏强る能はす。終に東面再拜死に就く。嗚呼鼎鑊前に在り從容迫らず、死を視る飴の如し。其意氣の凛然たる、秋霜烈日の如し、千古の烈丈夫と雖も、何を以て之に加へん。君年壯氣銳、夙に東亞の形勢を察し、深く自ら書策する處あり、其今日ある君の豫期する處と雖も、前途有望の身を以て、一朝兇刄に斃れ、素志の萬一を行ふ能はざるに至りては、天下誰れか之を悲み之を弔せざるもの有らんや。然りと雖も一死國に報ひ功名靑

史を照らし、赫々千萬年に亘り磨せざるもの、是れ豈に男子畢生の志望に非すや。今や王師連戰連勝旅順を拔き威海を陷れ、牛莊營口亦た皆我有に歸し、終に清國をして乞降の已むを得ざるに至らしむ。是我聖天子の威烈と帝國軍隊の忠武なることに依ると雖も、抑亦君の一死任務を全ふせるの功與りて多きに居ると云はざるべからず。嗚呼人誰れか死なからん、虎死して皮を留め、人死して名を留む、君に於て遺憾なかる可し、君以て瞑すべし。

明治二十八年三月二十二日

福岡縣知事代理　片山恭平

弔詞

故山崎羔三郎君は天下に先て憂たりと雖も、天下に後れて尙且つ樂む能はず、嗚呼哀哉。君多年清國に在りて民情を察し地勢を相したるは、天下に先て憂たるなり。上海の客窓に枕を駢て韓山の風雲に嘯きしは、天下に先て憂たるなり。其通譯官に補せらるゝや、第二軍に從て花園河畔に上陸し單獨深く敵地に入り、不幸虜兵の獲る所となり、終に東方を拜して斬らる。嗚呼何人か其忠烈を仰ぎ其死を哀まざらんや。況や予の如き足親しく君の行路を踏み、眼親しく君の死所を視たるものをや、雖然、君が名君が功は萬秋に亘りて赫灼たるべし。豈また天下の樂みを見ざるを悲まむや。鄉黨の諸士相謀り、君の爲めに壯大なる葬儀を行ふを聞き感慨措く能はず、聊か卑詞を述べて君が靈を弔ふ、君其れ來りて享けよ。

明治二十八年二月二十五日

（福岡步兵第二十四聯隊補充大隊長）

陸軍步兵少佐　佐藤英敦

祭詞

征淸第二軍司令部附屬通譯官故山崎羔三郎氏の葬儀に列席するは余の榮とする處なり。思ふに氏が從來の壯志と今日の偉功とは、旣に世人の捻聞せ

る所更に纒纏するを要せざるべし。所謂壯烈鬼神を泣かしむる者にあらずや。

今や我皇軍は向ふ處敵なく、國威日に揚る。氏亦以て瞑するに足らん。氏が郷里の人皆公義心に富み、盛大嚴肅の葬典を擧行せらる、氏が靈尚くは來り饗けよ。

明治二十八年三月二十五日

嘉麻穂波郡長從七位　岡田三吾

山崎羔三郎君の靈に告ぐ。

滿北の天孤鴻深く雲に沒し、遺叫一聲纔に「此度は決死入清」の句に留る。嗚呼爾が異服を裝ひ長劍を帶し、眼芒爛々たるの狀、猶眼に在り、而して六尺の鐵軀終に尋ぬ可らず。嗟呼噫春雨の肅條、何ぞ志士不泣の涙に擬せんと云はんや。然りと雖、生は死の根、死は生の根、不去不來の理則は間里の僧も又之を知る。大丈夫桑蓬四方の志を抱き一朝變に遇ふて國難に殉ず、爾豈に恨を浮世に遺して涅槃無境の淸に孤く有らんや。我斷じて爾が莞爾として冥に遊ぶを信ず。抑夫れ男兒の世に在る、斯の如く夫れ無數。而も凡氣滿身食ひ且つ衣て而して此世を畢はる者は、即ち實に徒に產して磨了する者のみ。曷ぞ能く死すと云ふの義に副はむや。天下滔々磨了する者相踵ぐ。爾獨り始に在ては嶄然として立ち、終に在ては斷然として逝く、爾が如きは眞に能く死して而して丈夫の眞面目を達するものと謂ふ可し。則ち我亦何爲れぞ婦女子の態に倣ふて傷心の情に己むや。由來英雄成敗迹多是慘憺、風雨中至慘至苦の處、即ち至皎至烈の光明不朽なる所以、爾始より來らず逝かずして而して所謂至皎至烈なるものは、長へに數世を照す。碌々たる我寧ろ爾が能く死するに鑑み、自ら反省して已まんのみ。爾請ふ夫れ我意を憐むで寂光に瞑せよ。

明治二十八年三月

頭山滿謹告

祭文

今茲に三月廿有五日、淸酌素羞の奠を以て故羔三郎山崎君の靈を故國の天

に招き、祭りて以て之に告ぐ。君夙に卓犖不羈の資を以て盡忠報國の志を抱き、早く西勢東壓の機を察して國權皇張の道を思ふ。而して泰東に國するもの啻に十のみならずと雖も、其の善く自主の權を奉持し、民の衆と邦の大と、以て泰西の强國と對立し、以て泰東の平和を繫維すべきものは、單に我國と淸國との二者あるのみ。然るに淸國の近狀を察すれば、夜郎徒らに自ら大とし、內を尊びて華となし外を卑みて夷と稱し、久しく今世文明の軌に違ひ、毫も國勢刷新の兆あらず、同人泰東の爲に殷として之を憂ふ。是時に當りて君年齒方に壯なり、同人の中より奮ふて曰く、淸國助く可くは之を助け、若し助く可らずば、我國代りて之を起し、以て泰東の靜平を保ち、以て東西の均衡を全くす可きなり。予れ請ふ赴きて之を觀ん。浩太郞一日君に長ずるの故を以て涓滴資する所あり、是に於て禹域の行あり。爾來斗柄頻に旋轉し、春秋六たび來往す。其間或は吳楚の風に櫛り、或は韓魏の雨に沐し、或は巴蜀の瘴を冒し、或は遼燕の雪を踏み、備さに辛楚を嘗め艱難を經、而て撓まず而して屈せず、二十一省四百州收めて君が方寸に藏し、歷々として指掌の如し。昨夏忽ち高麗に事あり、日淸其間に違言あり、彼我の大兵漢水を挾み、陣を對する事三月にして發せず。是時に當り、國論方に紛々、或は和を主とし或は戰を主とす。而も大抵皆謂へらく彼れ民衆土大、國固より富實に誇り、兵亦近ごろ精强を加ふ、未だ俄に圖り易からずと、君時に滬上に在り、慨然袂を投じて起ち、一劍の任に倚り曠世の志を載せ、六月海を渡り、七月韓に入り、身を挺して牙山の敵營に投じ、形を變じて成歡の胡陣に上り、周偵して審察し、具狀して詳稟す。九月捷音天閣に達し、一朝國論征淸に歸し、爾來王師陸海相接き、堂々として雷發し、半島の野を掃ひ渤海の水を清め、今は三遼を收めて燕齊を壓し、和使我が邊關を叩き、降旗敵の城頭に樹たんとするの盛を觀るに至りしもの、豈君が當日命を賭して人の爲す能はざる處をなし、將軍をして策を定め戰を決せしめたるの功に依らざらんや。其後君は旅順征討の日、又偵察の命を奉じ敢然再び蠻戎の陣に入り、幾たびか危きを踐み殆きを冒して屢々奇功を奏し、不幸にして終に賊の兇手に仆れ、生きて王師の

振旋して旋るを目睹する能はざらしむ、豈哀むべからずや。凡そ君の訃音到るや、知ると知らざるとなく胸を拊つて痛哭惋惜せざるはなし。而るを況や君と郷を同くし君と志を同くし、君を知る事深く君と交る事久しく、平素君が志業を賛けたる浩太郎の如き者に於てをや。然りと雖も、君の豊功殊勳は征清の偉業と共に永く千載に傳ふべく、君の洪圖壯志も亦討清の義擧より起りて以て世界に宣す可ければ、君其れ莞爾笑を含みて以て九玄の上に瞑すべきなり。顧ふに本郷元と僻して天の一隅に在り、從て甚だ天下に著はれず、今や君の一死に由りて、僻陬の名一朝九鼎大呂より重きものあり。其間父老の推托に依りて乏を代議士に受くる浩太郎が如き、亦由りて以て名譽なしとせんや。今月今日此垢壇を圍擁し君が英靈を祭るものは、皆君が誠忠精義に感泣し、君が豊功殊勳を景慕し、敬を致し虔を致す者に非るはなし。尙くは神か髣髴として九玄の上より降り之を饗けよ。

明治二十八年三月二十五日

祭文

衆議院議員　平岡浩太郎

玄洋社長進藤喜平太謹んで殉國通譯官山崎羔三郎君の英靈を祭る。

其れ君が雄志を齎らして淸國漫遊の途に上りしは、天下の有志多くは內政問題に跼蹐して、亦た眼を外交問題に注がざるときにあり、何ぞ知らん韓山の風雲激變して東洋の波瀾怒吼し天皇廣陵に親征し給ひ、六鎭の貔貅海を渡り以て妄淸を膺懲せんとは、君が雄志を見來れば、天下何人か感泣せざらんや。

客秋君は大本營の命を奉じて特別の重任を負ひ、第二軍に從ふて花園河畔に上陸するや、山河の形勢敵軍の狀態未だ得て知る可らず。是に於て君は同僚と手を分ち孤影殘月を踏んで征程に就く、悲哉敵手に落ち斬に金州城外に處せらる。

君の將に斬られんとするや、刑吏君をして西南に面せしめんとす。君刑吏を叱して曰く、扶桑は是れ我故國、聖天子の在る處、吾今死するも魂魄は

故國へ歸らんと、東天を拜して終に斬せらる。何ぞ其れ勇且烈なるや、其名其功千秋に傳へて後進の士を奮興せしむるに足る。而して眞に君が魂魄は故國に歸來して、今亦た斯の祭壇に在らん。

嗚呼此地は君が祖先の墳墓あり、彼の山此の水君が功名を千秋に傳ふべし、聊か鄙辭を陳べて君が英靈を祭る、君夫れ之を享けよ

明治二十八年三月二十五日

玄洋社長　進藤喜平太

此他樞密院顧問官副島種臣伯爵、衆議院議員尾崎行雄長谷場純孝柴四郎多田作兵衛藤金作福江角太郎等の人々、また吊電を贈りて意を表し、遠近より詩歌俳句を捧げて哀悼したる者極めて多く、皆以て君が殉節の光輝を發揚せり。人死して斯の如し、亦た遺憾なしと云ふべし。

死後の恩典

君未だ娶らずして死す、故に子なし。是れより先き、明治二十七年朝鮮の軍に從ふ頃、家兄致の三女ミツキを養ふて嗣と爲し、後ち三年明治二十九年十一月、福岡市古門戸町の士族安永藤之助の弟亮五郎入りて山崎氏を承く。因て陸軍省及び賞勳局總裁は、君の遺功を錄し恩賞を加ふるや、ミツキと亮五郎とに對して辭令を與ふ。

寫

故雇員山崎羔三郎孤兒

山崎ミツキ

一、吊祭料　金貳拾五圓

一、扶助料　金百圓

右明治二十七年勅令第百六十四號ニ依リ下賜ス

明治三十年十月九日

陸軍省印

寫

故雇員山崎羔三郎孤兒

金貳百五拾圓

雇員山崎粂三郎明治二十七八年ノ役死歿シタルニ依リ特別ヲ以テ前記ノ金額ヲ賜與ス

明治三十年十月九日

陸軍省印

寫

山崎亮五郎

故陸軍省雇員山崎粂三郎明治二十七八年戰役ノ功ニ依リ金貳千四百圓ヲ賜フ

明治二十九年十一月十五日

賞勳局總裁正三位勳一等　子爵　大給恒　㊞

前記二件の辭令に山崎ミツキの名を用ひたるは、蓋し亮五郎入りて山崎氏の戸主となりたる事實、未だ陸軍省の知る所とならざる時に成りたるを以てなり。而して恩賞たゞ斯の如きに止るは、臨時撰任せられて特別の任務に服したるが故なりと云ふ。

此の間また殉節の遺功を錄せられ、靖國神社に合祀し、永く勅祭を享るの恩典を賜ふ。

三十三年の法事と山口村の記念碑

烏兎匆々、君逝いて將に三紀ならむとす。今こゝに三十三周年の忌辰を迎ふるや、鄕黨の軍人會、青年團主として相謀り、諸方の贊助を求めて追遠の法事を修め、また山口村小學校の校庭に君の記念碑を建て、年少以來深誼ある先輩頭山滿翁、筆を執りて殉難烈士山崎粂三郎君之碑と題し、今の內閣總理大臣田中義一男爵自ら誌文を作りて之を表せらる。誌文に曰く。

君初名ハ瀧、福岡藩士白水淸八ノ第三子ナリ、元治元年七月筑前國福岡贊

子町ニ生ル。明治廢藩ノ際、其長兄ト共ニ從テ鞍手郡山口村ニ住ス。後出テ山崎氏ヲ冒ス。天賚倜儻常ニ東亞ノ振興ヲ以テ自ラ任シ、常ニ玄洋社ニ遊ビ、奇節ヲ以テ推ス所トナル。明治二十一年支那ニ航シ荒尾精等ト結ブ所アリ。華音ヲ修メ辮髮ヲ蓄ヘ、孤劍飄然深ク內地ニ赴キ、四百餘州殆ト其足跡ヲ印セサルナシ。明治二十七年東亞ノ風雲正ニ急ヲ告タルヤ、君時ニ上海ニ在リ。蹶然起テ朝鮮ニ赴キ我混成旅團司令部ニ屬シ、敵情偵察俘虜訊問等、其貢献スル所寔ニ多シ。平壤戰勝ノ後、大本營ニ召サレ第二軍司令部附通譯官ノ命ヲ拜シ、撰バレテ特別秘密偵察ノ任務ヲ授ケラル、十月二十四日軍司令官大山大將以下幕僚ト共ニ遼東半嶋花園河ニ上陸シ將ニ大ニ爲ス所アラントス。不幸ニシテ清國巡邏兵ノ捕フル所ト爲リ、金州西門外ニ於テ斬ニ處セラル。君刑場ニ臨ムヤ、神色自若大呼シテ曰ク、我ハ大日本帝國臣民山崎羔三郎ナリ、速ニ我頭ヲ斬レト、東ニ面シ從容トシテ死ニ就ケリ、時ニ年三十一、實ニ明治二十七年十月三十一日ナリ。頃者同志胥謀リ碑ヲ鄕里ニ建テ、其忠烈ヲ不朽ニ傳ヘント欲シ、文ヲ予ニ囑ス。顧フニ征清ノ役予亦職ヲ奉シテ第二軍ニ在リ、君ノ特別任務ヲ帶ヒテ敵地ニ向フヤ、予其行ヲ壯トシ、手ヲ携ヘテ共ニ營門ノ外ニ出テ目送スルモノ之ヲ久ウス。嗚呼君卓落有爲ノ材ヲ齎ラシテ獨リ逝ク。然リト雖其忠精凛々死シテ餘馨アリト謂フベシ。乃チ文ヲ綴リテ之ヲ石ニ勒セシムト云フ。

大正十五年十月

陸軍大將從二位勳一等功三級　男爵　田中義一　撰

文辭簡明にして力あり、叙述また畢生の事蹟を悉くせり、抑々渺たる西邊の布衣より起り、自ら奮ふて天下の士となり、夙に殉國奉公の志を抱き、終に身を献して難に殉す。萬人の齎しく欽仰景慕するは、固より其所とす。顧ふに、我鄕は僻陬の山村未だ世に著はれず、人事久く寂寥を極む。今や君の精忠義烈を得て、第一流の偉人自ら筆を執りて碑銘の字を作り、誌文また永く存せむとす。閭里爲に光を放ち溪山爲に色を生ずるを覺ゆ。嗚呼これ唯獨り君が一家一身の榮譽のみにあらざるなり。

補遺

此小傳已に成るの後、內田良平先生二三の逸話を敎へらる、乃ち追加して補遺三則を作る。

山崎君出でて、福岡に在るの日、中島町の服部と云ふ寫眞師に就て撮影の術を學ぶ、已にして再び支那に航するや、服部を伴ふて行けり。未だ幾ばくならず、服部獨り先づ歸朝す。人その故を問ふ。服部答へて曰く、山崎氏と予とは全く目的を異にす。予は金儲の爲に渡航せしかど、山崎氏は支那を取らむと欲して渡航せしを發見せり。故に別れて獨り先づ歸來せりと。山崎君當時の志望遠大にして市井の寫眞師を驚倒したるを思ふべし。

牙山成歡の役に、我軍の全勝を得たるは、山崎君の自ら進んで敵營を偵察し、歸つて報告する所あり、我軍奮ふて大膽なる攻勢を取り進擊したるに由ると云ふ、當時好評嘖々として行はれ、巨商三井の如きは京城の社宅を山崎君の使用に供して優

遇の意を表す。內田先生當時また京城に在り、山崎君の住所に假寓して暫く起居を同くせり。

山崎君一たび廣島に歸へり、軍事探偵の重任を帶びて發せむとす。時に平岡浩太郎氏衆議院議員の職を以て廣島に在り、一日送別の志を表し、宮島めぐりの壯遊を試む。此時山崎君の顏色惡しく氣色揚らざりしかば、平岡氏その健康に故障なきや否を問ふ。山崎君答ふるに何の異狀なきを以てせり。然るに、平岡氏は嘗て明治戊辰の役に從ひたる經驗あり、戰死せる者の顏色皆斯の如くなりしを記憶し、絕えず山崎君の前途に關心せり。後ち金洲半島の殉難あり、此間の憂慮果して適中せり。

昭和三年二月二十五日印刷
昭和三年二月二十八日發行

（非賣品）

編輯兼發行人　福岡縣鞍手郡山口村
山口村在鄉軍人分會
代表　壚川角太郎
山口村青年團
代表　木本盤之助

印刷人　福岡市東職人町十八番地
大隈龍介

印刷所　福岡市下名島町五十四番地
福岡印刷株式會社
電話六二番
振替福岡一五〇〇〇番

318
50

終